

## 八王子市読書感想文コンクール作品の分析とその課題

——2016年度中学校の部を中心に——

小 山 憲 司

### 目 次

1. はじめに
2. 調査方法
3. 調査結果
4. 考 察
5. おわりに

### 1. はじめに

2018年5月、ポプラ社が開催した「小学生が選ぶ! “こどもの本” 総選挙」の結果が公表され<sup>1)</sup>、話題を呼んだ。12万票以上の投票によって選ばれた図書リストによれば、さまざまなメディアでも取り上げられた『ざんねんないきもの事典』(高橋書店, 2016)が1位を獲得したのに加え、その続編である『続ざんねんないきもの事典』(高橋書店, 2017)が4位となった。また、2位となった『あるかしら書店』(ポプラ社, 2017)で著名なヨシタケシンスケ氏の作品がトップ10に4作品入ったほか、小学生の間で人気の高い『おしりたんてい』シリーズから2作品が選ばれるなど、近年話題となった作品や著者の作品が目立ったように思われる。その中で、『ぼくらの七日間戦争』は唯一、初出が1985年の図書であった。1988年に映画化もされた本作品であるが、今回投票した小学生は当時のことを知る由もない。それでもなお、長く読みつがれてきた本書がランクインしたという事実に興味を覚えるとともに、子どもたちの読書を考えるうえで有効な情報であると考えられよう。

読書離れが叫ばれる今日、国や地方自治体、そ

の他さまざまな組織で、子どもたちの読書を推進する動きが活発である。国は2001年に「子どもの読書活動の推進に関する法律」を制定し、四次にわたる「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」<sup>2)</sup>を策定し、施策を推進している。これに合わせて、地方自治体でもそれぞれ計画を策定し、読書活動を推進することが求められている。そのような中で、公立図書館や学校図書館が果たす役割は極めて大きいと言える。

では、具体的に図書館は何かができるのであろうか。図書館では、0歳児検診時に絵本の紹介や読み聞かせ、プレゼントを行うブックスタートをはじめ、図書館での読み聞かせ、お話の時間、学校での出張読み聞かせなど、さまざまな活動を早くから展開してきた。こうした活動をより実りあるものにするためには、普段から子どもたちの読書傾向を知ること努める必要がある。

そこで筆者らは、2017年度より開始した八王子市図書館と本学との共同研究の一環として、八王子市図書館が主催する読書感想文コンクールの応募作品に着目し、そこで用いられる図書を分析することにより、子どもたちの読書傾向の把握を試みることにした。先に紹介した「小学生が選ぶ! “こどもの本” 総選挙」の結果と同様、その読書傾向を明らかにすることで、図書館や学校での読書推進活動に貢献できたらと考えたからである。

共同研究の初年度であった2017年度には、中央大学文学部人文社会科学科社会情報学専攻の学生2名が、卒業論文の研究として、2016年度の読書感

想文コンクール作品を分析した。その結果、子どもたちの図書の選択が幅広いこと、小学生に関して子どもの読書興味の発達段階との関連が確認できたこと、中学生に関して映像作品の原作本などマスメディアで話題になった図書が選ばれていることなどが明らかとなった<sup>3)</sup>。しかしながら、コンクール用に選ばれた図書の幅広さや刊行実態の多様さなどから、調査法が十分に確立できたとは言いがたい。そこで、本研究では、2つの卒業論文研究で用いられたデータを精査し、その分析を再度試みるとともに、調査にあたっての課題を明らかにすることとした。

本稿の構成は次のとおりである。まず2章で本研究の対象となった八王子市読書感想文コンクールの概要を紹介し、調査方法を説明する。3章では、読書対象となった図書の特徴と八王子市図書館における所蔵状況の2つの観点から、調査結果をまとめる。4章では調査結果をあらためて整理するとともに、調査にあたって見えてきた課題を提示したい。

## 2. 調査方法

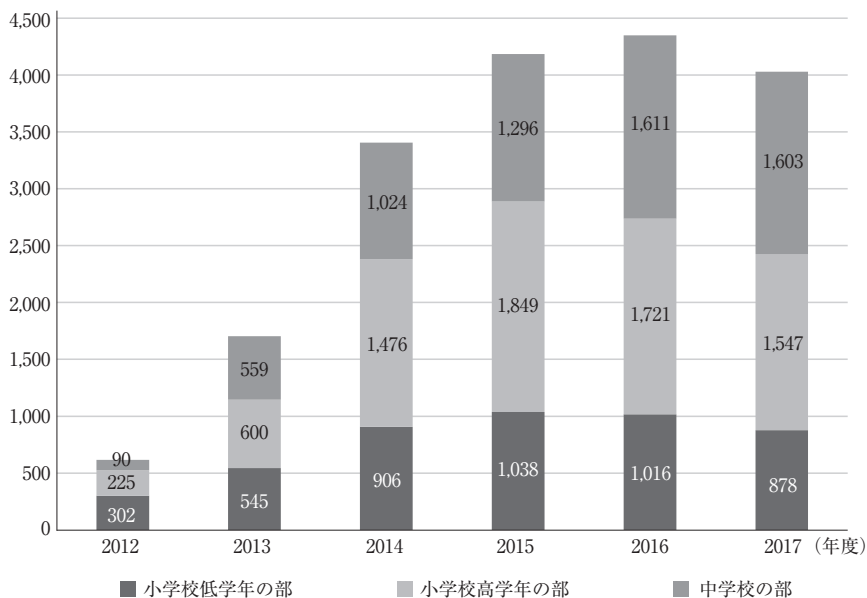
### 2.1 八王子市読書感想文コンクールの概要

八王子市教育委員会は、夏休みに合わせて、2005年度から読書感想画コンクールを、2012年度からは東京八王子西ロータリークラブとともに、読書感想文コンクールを開催している<sup>4)</sup>。いずれも八王子市在住または在学の小中学生が対象である。

読書感想文コンクールは、小学校低学年の部（1年生から3年生）、高学年の部（4年生から6年生）、中学校の部の3部門から成り、それぞれ400字詰め原稿用紙1枚から3枚、2枚から4枚、3枚から5枚が応募作品の条件となっている。応募作品の中から、市長賞1名、教育長賞1名、東京八王子ロータリークラブ会長賞1名、優秀賞および入選7名の合計10名が表彰される。このうち、中学校の部で入賞した生徒は、八王子市ジュニア国際交流フレンドとして台湾高雄市に派遣され、同市の生徒と交流する機会が提供されている。

読書感想文コンクールの応募者数は、初年度と

図1 読書感想文コンクール応募者数の推移



なった2012年度は617人（小学校低学年の部302人、高学年の部225人、中学校の部90人）であったが、年を追うごとに増加している。2017年度は減少したものの、応募者数は4,028人（小学校低学年の部878人、高学年の部1,547人、中学校の部1,603人）であった（図1）。

## 2.2 研究対象と分析方法

本研究では、過去に6回行われた読書感想文コンクールのうち、2016年度に応募があった中学生の作品を対象に、その読書傾向を分析する。分析にあたり、八王子市図書館から応募者の所属学校名、学年、読書感想文の対象とした図書のタイトルの3つの情報をリスト形式で提供いただいた。

リストには図書のタイトルのみ記載されていたため、その他の事項を八王子市図書館OPACおよび国立国会図書館オンラインで補った。具体的には、その図書の著者、出版者、出版年、ページ数、大きさ、シリーズ名、ISBNの書誌的事項のほか、日本十進分類法（以下、NDC）の分類記号や再版されたときの文庫名を調査した。また、八王子市図書館の所蔵情報として記載されていた請求記号と形態を追記した。形態は、その資料の性格を表す情報で、一般、児童、参考、郷土、視聴覚、障害者資料、雑誌、電子の8種類21区分から付与される。このうち、一般と児童の2区分に注目することで、選択された図書の性格を把握することができると考えた。

リストの整備にあたって注意したことは、次のとおりである。

### ① 再版される図書

文学作品をはじめ図書の中には、ハードカバーで出版されたのち、文庫として再版されるものがある。この場合は、初出の図書を読書対象と見なして記録し、再販された文庫名を追記した。

### ② 多巻図書

上下巻や全10巻など、同一タイトルの下で複数の巻が発行される図書がある。これらは、読書対

象とした巻数が明確な場合はその巻を、特定できない場合は初巻と見なして記録した。

### ③ 古典作品

夏目漱石の『坊っちゃん』やL. M. モンゴメリの『赤毛のアン』など、初出以来、複数の出版者から発行されたり、異なった翻訳者による図書が出版されるものがある。応募者がどの図書を読んだかを特定することは難しいと同時に、特定できたとしても別の図書として扱うのは適切ではない。そこで、原作が1950年以前に発行されたものを「古典」として扱うこととした。

## 3. 調査結果

### 3.1 結果の概要

2016年度の中学生の部の応募件数は、1,611件であった。このうち、読書対象となった図書を特定できなかったものが11件あった。その結果、本研究で分析するのは、1,600件である。

1,600件の中には、複数の応募作品で扱われている図書が含まれている。重複を除いた図書の件数は901件であった。本稿では、これら901タイトルの図書の所蔵状況、人気度、著者、主題、出版年、読者対象、出版形態の各観点から、読書対象となった図書の傾向を分析する。また、これらの図書が選ばれた背景も検討する。

### 3.2 所蔵状況

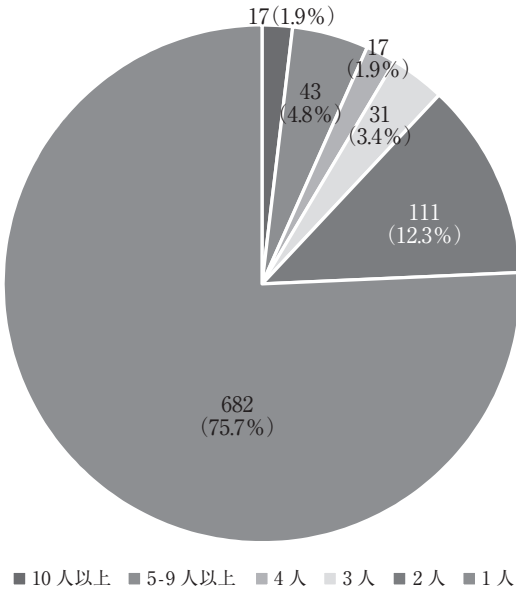
分析対象となった901タイトルの図書のうち、八王子市図書館で所蔵している図書は776タイトルで、86.1%を占めた。一方、未所蔵図書は125タイトル（13.9%）であった。

### 3.3 読書対象となった図書の特徴

#### (1) 図書選択の集中度

はじめにでも触れたように、子どもたちが選ぶ図書はそのときどきに人気のあるものもあれば、長く読みつがれるものもある。応募した中学生は、読書感想文の対象としてどのような図書を選んだ

図2 図書選択の集中度



のであろうか。

図2は、同一の図書が何人に選ばれたのかを集計したものである。10人以上から選ばれた図書は17タイトルで1.9%であった。5人から9人に選ばれたものは43タイトル(4.8%)、4人に選ばれたものが17タイトル(1.9%)、3人が31タイトル(3.4%)、2人が111タイトル(12.3%)であった。1人の応募者にのみ選ばれた図書は682タイトル(75.7%)で、全体の4分の3を占めた。ある一定数の図書に人気が集まってはいるものの、多くの生徒が幅広い選択をしていることが確認された。

## (2) 人気度

では、どのような図書に人気が集まったのであろうか。表1は、上位10タイトルを示したものである。このうち5タイトルは、直近2年の間に映画化されたものである。また、5位の『君の隣をたべたい』や8位の『ぼくは明日、昨日のきみとデートする』は映画公開を控えた人気作品でもあった。『星の王子さま』や『走れメロス』といった長く読みつがれる図書も多くの生徒に選ばれて

表1 コンクールで選ばれた図書上位10タイトル

	タイトル	人数	映画公開時期
1	世界から猫が消えたなら	42	2016年5月
2	小説君の名は。	25	2016年8月
2	バケモノの子	25	2015年7月
4	星の王子さま	18	
5	学年ビリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶応大学に現役合格した話	15	2015年5月
5	君の隣をたべたい	15	2017年7月
7	おおかみこどもの雨と雪	14	2012年7月
8	ぼくは明日、昨日のきみとデートする	13	2016年12月
9	青空エール	12	2016年8月
9	走れメロス	12	
9	ハリー・ポッターと賢者の石	12	2001年12月
9	ぼくらの七日間戦争	12	1988年8月

いるが、映像作品に関連する図書は、生活のさまざまな場面で見聞きすることから、手に取りやすいのかもしれない。

上位10タイトルのうち、『ハリー・ポッターと賢者の石』および『ぼくらの七日間戦争』は、シリーズとしても人気が高い。前者を含む「ハリー・ポッターシリーズ」を集計すると19人、後者を含む「ぼくらシリーズ」は16人であった。「子どもたちが選ぶ本」にも選ばれる息の長い図書の1つであるが、本調査結果からもこのことが確認できた。

## (3) 著者

つづいて、どの著者の図書に人気が集まったのかを確認するため、著者に注目して集計した。上位20人を示したものが表2である。その結果、一般に人気の高い、著名な小説家が並んだ。このうち、1位の川村元気、3位細田守、6位新海誠、7位J.K. ローリング、9位住野よる、10位サン＝テグジュペリと七月隆文、12位の宗田理、太宰治、17位坪田信貴は、いずれも1つの作品を10人以上が選んだ図書の著者であり、図書そのものの人気によるところも大きい。

表2 コンクールで選ばれた図書（重複あり）の著者上位20人

	著者名	人数		著者名	人数
1	川村 元気	49	10	七月 隆文	18
2	山田 悠介	46	12	あさのあつこ	17
3	有川 浩	39	12	宗田 理	17
3	細田 守	39	12	太宰 治	17
5	重松 清	36	12	湊 かなえ	17
6	新海 誠	26	16	夏目 漱石	16
7	東野 圭吾	20	17	坪田 信貴	15
7	J.K. ローリング	20	18	上橋 菜穂子	14
9	住野 よる	19	18	辻村 深月	14
10	サン＝テグジュペリ	18	20	水野 敬也	13

表3 コンクールで選ばれた図書（重複なし）の著者上位19人

	著者名	件数		著者名	件数
1	山田 悠介	18	7	湊 かなえ	6
2	重松 清	15	7	J.K. ローリング	6
3	有川 浩	11	13	今西 乃子	5
3	東野 圭吾	11	14	乙一	5
5	赤川 次郎	9	15	鎌田 洋	5
6	あさのあつこ	7	16	はらだみずき	5
7	池井戸 潤	6	17	百田 尚樹	5
7	伊坂 幸太郎	6	18	宮沢 賢治	5
7	宗田 理	6	19	宮部みゆき	5
7	はやみねかおる	6			

そこで、コンクールで選ばれた図書901タイトルを著者別に集計した（表3）。その結果、1位は山田悠介で18タイトル、2位が重松清で15タイトル、3位に有川浩と東野圭吾がそれぞれ11タイトル、5位に赤川次郎9タイトルとつづいた。赤川次郎をはじめ、表2では見られなかった著者が11名登場している。ある特定の図書に注目が集まる一方で、ある特定の著者もまた、図書選択の要因の1つになっていることが推測される。

#### (4) 主 題

読書感想文向けに選ばれる図書の主題をNDCを

表4 コンクールで選ばれた図書の主題別内訳

分類	件数	割合	分類	件数	割合
0類 総記	2	0.2%	6類 産業	22	2.4%
1類 哲学	27	3.0%	7類 芸術・美術	51	5.7%
2類 歴史	43	4.8%	8類 言語	1	0.1%
3類 社会科学	18	2.0%	9類 文学	703	78.0%
4類 自然科学	19	2.1%	絵本	8	0.9%
5類 技術・工学	7	0.8%			

用いて確認したところ、最も多かったのが9類（文学）の703タイトルで、全体の78.0%を占めた（表4）。つづいて7類（芸術・美術）の51タイトル（5.7%）、2類の43タイトル（4.8%）であった。

9類の内訳を見ると、日本文学が最も多く575タイトルで、全体の63.8%を占めた。次に多かったのは英米文学で99タイトル（11.0%）、これにつづきドイツ文学15タイトル（1.7%）、フランス文学9タイトル（1.0%）、イタリア文学3タイトル（0.3%）、中国文学およびギリシア文学がそれぞれ1タイトル（0.1%）であった。日本文学の中でも近代小説（913.6）が541タイトルで、全体の6割を占めた。

7類と2類の図書も多く選ばれていたが、その中には伝記も多く含まれている。NDCでは伝記は289という分類記号が割り当てられているが、「哲学者、宗教家、芸術家、スポーツ選手〔スポーツマン〕、諸芸に携わる者および文学者（文学研究者を除く）の伝記は、その思想、作品、技能などと不可分の関係にある」<sup>5)</sup>ため、それぞれ各主題の下に置かれる。これらを踏まえて、伝記に相当する図書を調査したところ、全体の7.2%にあたる66タイトルが該当した。

この内訳を見ると、サッカー選手や野球選手などのスポーツ選手の伝記が21タイトル、歴史上の人物を扱ったものが20タイトル、芸能人が7タイトル、芸術家が4タイトル、その他現代人が14タイトルであった。

### (5) 出版年

図3は、901タイトルの図書を出版年ごとにグラフ化したものである。集計にあたっては①同一作品の最も古い刊行年を採用すること、②翻訳図書は原著の出版年とするものの2つを基本とし、1950年以前発行のものは「古典」としてカウントした。その結果、2015年に出版された図書が91タイトルと最も多く、全体の10.1%であった。2012年から2016年の直近5年に刊行された図書は363タイトル(40.3%)、2007年からの10年間分では570タイトルで63.3%にのぼった。

他方、選ばれた図書の中には、長く読みつがれるものも多く含まれている。本研究では1950年以前に出版されたものを古典として扱っているが、そのタイトル数は67で、全体の7.4%であった。2000年以前刊行の図書に範囲を広げると209タイトルとなり、全体の4分の1弱(23.2%)であった。

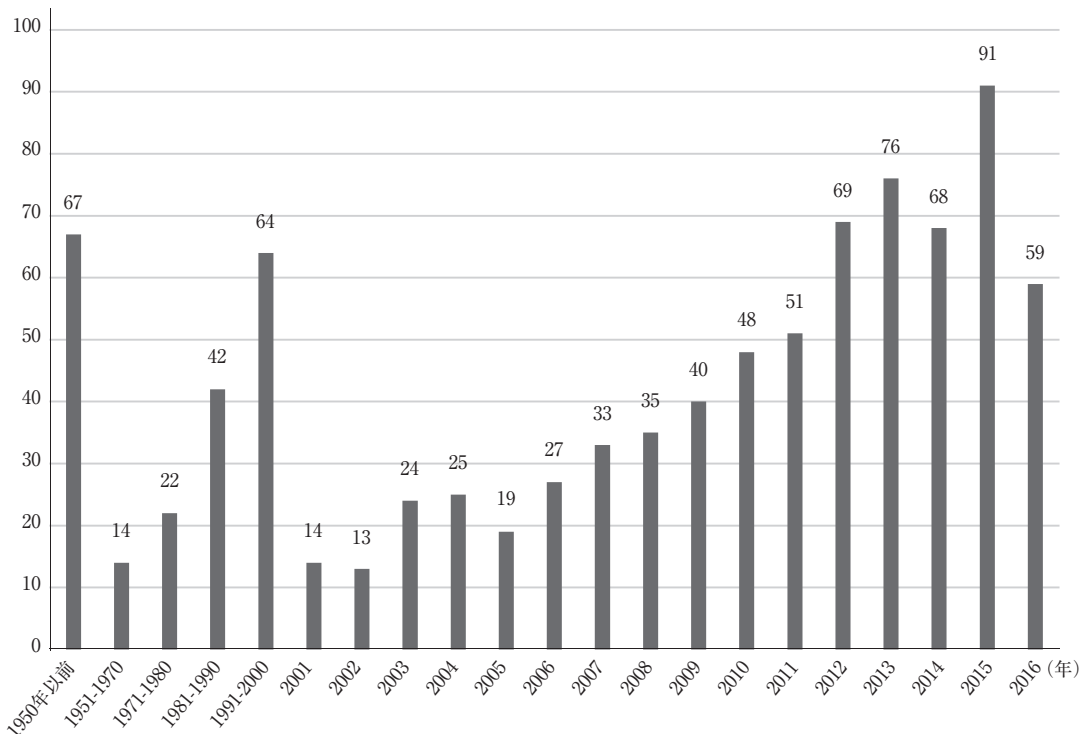
### (6) 読者対象

八王子市図書館で所蔵している図書には、所蔵情報の形態欄にその図書の性格を表す情報が付与されている。このうち、一般利用者向け書架に排架される図書(表示は「一般」)および児童コーナーに排架される図書(表示は「児童」という情報に着目して、中学生がどのような性格の図書を選んだのかを検討した。

集計の際、同一図書を複数所蔵し、かつ一般または児童の両方が付与されている場合には、児童向け図書としても認知され得ると考え、児童とした。また、古典に該当する図書は、繰り返し出版される際に児童向けの図書として出版されることも少なくないことから、これらも児童として集計することとした。

その結果、八王子市図書館で所蔵されている776タイトルのうち、一般に該当するものは454タイ

図3 コンクールで選ばれた図書の出版年別内訳



トルで58.5%であった。他方、児童は322タイトルで41.5%であった。

これらを学年別にまとめたものが図4である。1年生の場合、一般が162タイトルであるのに対し、児童が205タイトル（うち古典は24）であった。また2年生は一般が207タイトル、児童が104タイトル（うち古典は13）、3年生は一般が85タイトル、児童が13タイトル（うち古典は4）という結果となった。学年があがるにつれて児童コーナーに排架される図書を選ぶ生徒が少なくなっていく傾向が確認された。

#### (7) 出版形態（文庫）

応募者は、応募にあたって所定の様式に記載して、読書感想文とともに提出する。様式には読んだ図書のタイトル、著者、出版社を記載する欄が設けられているが、出版社の欄に各出版社が発行する文庫名を記す例が多く見られた。また、読書対象となった図書の中にも、文庫として発行されるものが少なくなかった。中には文庫としてのみ発行される図書も含まれていた。出版形態の一種である文庫が図書選択の理由の1つにあるのでは

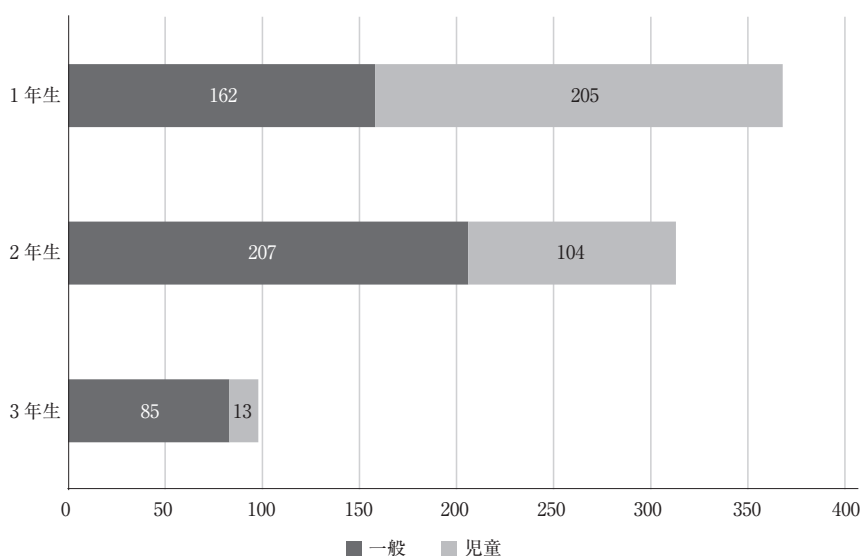
ないかと考え、集計した。

① 出版社欄に文庫名が記載されている、② 当該図書は文庫でのみ発行されている、の2つの条件いずれかに合致するものを抽出したところ、1,600件中739件がこれに該当した。全体の46.2%を占める結果となった。

少なくとも46.2%の生徒が文庫形態の図書を選んでしたが、その要因の1つに各出版社が開催する夏のブックフェアの影響が考えられる。角川文庫は「カドフェス」、集英社は「ナツイチ」、新潮社は「新潮文庫の100冊」という名称で、2016年度はそれぞれ95冊、86冊、102冊を選び、販売促進活動を行っていた。

フェア対象となった図書から多巻図書をまとめたり、重複を除去したりすると、3社合計で269タイトルが紹介されていた。このうち、読書感想文の対象に選ばれたのは79タイトル（29.4%）であった。この79タイトルを選んだ応募者は、303人で18.9%を占めた。なお、この79タイトルは、全体の901タイトルの8.8%に相当した。

図4 コンクールで選ばれた図書の学年別読者対象内訳



## 4. 考 察

### 4.1 調査結果のまとめ

2016年度の読書感想文コンクールで選ばれた図書901タイトルを分析した結果、八王子市図書館はその9割弱を所蔵していた。1つの図書館ですべての資料要求を満たすことはできないし、未所蔵の図書が八王子市の図書館コレクションとして適切かどうかの判断は難しいものの、中学生の読書要求にかなう図書が収集されていると推察される。

読書感想文という特殊な状況下での図書選択であるが、応募者である中学生は幅広い範囲の中から図書を選んでいることも確認できた。調査開始前は、ある特定の図書に人気が集中しているのではないかと想定していたが、全体の4分の3は1名のみが選んでいる図書であった。

複数の読者から選ばれる図書は、映画などで話題となった作品が多く含まれていた。また、著者の知名度も図書選択の要因の1つになっていることが予想された。中学生にとって馴染みのあるものと言えば、学校の教科書で取り上げられる作品や、長く読みつがれてきたものであると考えられる。サン＝テグジュペリの『星の王子さま』や太宰治の『走れメロス』はその代表と言えよう。

図書の主題に注目すると、文学作品が約8割を占めた。なかでも、日本文学が6割強という結果となった。また、伝記作品も7.2%で、歴史上の人物のほか、スポーツ選手のものが顕著であった。

読書対象となった図書は、直近5年に刊行された図書が4割を占めた。また、対象範囲を過去10年間に刊行された図書に広げると6割強となった。最近話題に上ったものが多く含まれていることがこうした結果に繋がったと予想されるが、その一方で過去から読みつがれる図書にも一定数のニーズがあった。図書と出会う機会をどのように演出するかが課題の1つとして示された結果と言える。

このことは、中学生が図書館で児童書として扱われている図書を選んだり、文庫形態の図書を積

極的に選んだりする姿勢にも関連する。ティーンエイジャーの入口にいる中学生が選ぶ図書は、児童向けから一般成人向けのものまで多様であることがあらためて確認された。また、携帯にも便利で気軽に手に取れる文庫形態の図書が好まれる傾向も見られた。夏休みに出版社や書店が開催するブックフェアがどの程度影響しているかを本調査から明らかにすることはできないが、図書選択に多様な要素が絡んでいることが窺われた。

### 4.2 課 題

本調査を進めるにあたり、いくつかの課題も見えてきた。ここでは、①多巻図書、②古典作品、③複数の発行形態を持つものの3点について、具体的に例示しながら紹介する。

#### (1) 多巻図書

2.2でも触れたが、読書感想文の図書として選んだと紹介されるものの中には、1つの作品が複数の冊子に跨って発行されるものが数多く確認された。例えば、佐藤多佳子の『一瞬の風になれ』は、上中下巻の3冊から成るが、物語は連続している。したがって、これを読書感想文の対象とするのであれば、3冊すべてを読んでから感想文を執筆することになるであろう。この場合は、上巻を対象図書の代表と見なして集計、分析した。

一方、全5巻から成る、はらだみずきの『サッカーボーイズ』は、各巻それぞれに「再会のグラウンド」「雨上がりのグラウンド」「蝉時雨のグラウンド」「約束のグラウンド」「ラストゲーム」というサブタイトルが付いている。正確には、2巻にあたる図書は『サッカーボーイズ13歳』、同様に3巻は『サッカーボーイズ14歳』、4巻『サッカーボーイズ15歳』、5巻『サッカーボーイズ卒業』が正式のタイトルであり、「サッカーボーイズ」はシリーズ名と見なすのが妥当であろう。ただし、応募用紙の記載内容からは、どの巻を読んだのか読み取れるものもあれば、「サッカーボーイズ」とのみ記されるものもある。何よりも、各巻



で独立した作品としても読むことができるという特徴を持つため、いずれか1巻のみを読んだのか、それとも複数冊あるいは全5巻を読んで読書感想文を執筆したのかは、これらの情報からだけでは正確に判定できない。本調査では、明確に判断できるものはその特定の巻を、分からないものは初巻を読んだと見なして集計した。

児童・生徒向けの図書には、こうした多巻図書として刊行される人気作品が少なくない。明確に区分はできなくとも、ある一定の方針に基づいた集計方法を確立する必要がある。

## (2) 古典作品

(1)と同様、2.2で触れたとおり、本調査では1950年以前に発行されたものを「古典」と見なして集計した。例えば、ディズニー映画にもなった『美女と野獣』は、その映画の小説版である『美女と野獣』（偕成社、1997）のほか、原作者のヴィルヌーヴが著した『美女と野獣』（白水社、2016）やヴィルヌーヴの著作を基にしたポーモンによる『美女と野獣』（角川書店、1971、角川文庫など）がある。これを選んだ生徒は、世の中にあるいずれかの『美女と野獣』を読んだのであろうが、その図書を確定することは簡単ではない。また、確定できたとしても、その図書を読むことと、その作品を読むこととは切り分ける必要があると考え、本調査では「古典」という概念を導入した。また、同様の観点から、ある図書が文庫として再販されるという事実にも注目した。

## (3) 複数の発行形態

(2)にも関連するが、ある図書がハードカバーで発行されたのち、文庫として再販されることがある。特に、文学作品には顕著な慣習であろう。ある作品が複数の発行形態で刊行される場合、生徒は何を読んで読書感想文を書いたと言えるのであろうか。

例えば、上橋菜穂子の『獣の奏者』（講談社）は全4巻から成る文学作品である。2006年に刊行が始まり、最終巻となる4巻は2009年に発行され

た。その後、2009年に1巻が講談社文庫として発行され、4巻まで刊行された。さらに、児童向けの出版社シリーズである講談社青い鳥文庫からも、各巻がそれぞれ上下2分冊となって合計8巻が刊行された。このほか、武本糸会の漫画によるコミック（全11巻）もある。

コミックは読書感想文の応募要項から外れるため検討の対象外としても、ハードカバー、文庫、そして児童向け文庫の3つは、作品が同一であるからと言って、2006年刊行をこれらの代表として扱うことは適切なのであろうか。本調査ではそのように取り扱ったが、児童・生徒の読みに着目するのであれば、どのような意図で編まれた図書なのか、その図書の性格もまた、重要な観点と言える。今後の課題の1つである。

## 5. おわりに

本研究が対象としている図書は、読書感想文を執筆するために中学生が選んだものである。したがって、本調査結果は、中学生の読書一般を代表するものではないことに留意する必要があるし、そうした意図を持った研究ではないことを付言しておく。

また、本稿で対象とした読書感想文は2016年度開催の中学生部門のみであった。今後は、本研究の手法を基礎として、2012年度以降の各年度、および小学生の2つの部門も分析の対象に加えたい。

付記 本稿を執筆するにあたり、八王子市図書館の関係者のみなさまには情報提供から作業場所の提供、調査結果に関するさまざまな疑問、意見、助言をいただくなど、多大なご協力を頂戴した。ここに記して感謝を申し上げます。また、2016年度の読書感想文の分析は、2017年度に中央大学文学部人文社会科学部社会情報学専攻を卒業した鈴木かおり氏、岡本沙桜里氏の卒業論文のテーマであり、データの作成、整備は二人の成果である。これがなければ、本論文の執筆および研究の継続はなかった。あらためてここに記して感謝したい。

- 1) “小学生が選ぶ! “こどもの本” 総選挙”. こどもの本総選挙事務局. [2018], <https://www.poplar.co.jp/company/kodomonohon/> (参照 2018-09-30)。
- 2) 第三次までの名称は「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」であった。
- 3) 岡本沙桜里. 子どもの読書推進活動と公共図書館. 中央大学, 2017, 卒業論文. ; 鈴木かおり. 若者に魅せる図書館づくり: 原作本を活用した図書館サービスの可能性. 中央大学, 2017, 卒業論文。
- 4) “読書感想文コンクール”. 八王子市図書館. <https://www.library.city.hachioji.tokyo.jp/sentence> (参照 2018-09-30)。
- 5) もりきよし原編, 日本図書館協会改訂, 日本十進分類法. 本表・補助表編. 新訂10版. 2014, 日本図書館協会, 149頁。